

## 春三と「赤」

おきな

春三は、北の方の國の山中の一軒家に住つて居る  
 或る農夫の一人子でありました。山中の一軒家で  
 すから、村から遠く離れて居て、其家から村へ行  
 く道も、峻しい山や坂やを越えて行かねばなりま  
 せん。

或夜、春三のお母さんは、急に病氣が起りました  
 たので、お父つさんは、直ぐ村のれ醫者の所へ行つ  
 て藥を買つて來ようとした。すると春三は  
 「れ父つあん、私の方がお父つあんよりも村へ行  
 く道をよく知つて居ますよ、夫に「赤」さへ連れ  
 て行けば大丈夫だと思ひます。どうか、私をれ使  
 にやつて下さい、そして、お父つあんは家に居て  
 おつ母さんの番をして居て下さいまし」

「赤」といふのは年久しく飼つて居る此家の犬です  
 が、行儀よく庭に座つて、そしてお父つあんの顔  
 を見ては尾を振つて居ます、其風が丁度  
 そーですとも、お父つあん、僕は、ずん／＼道案  
 内して行きますから、どうか、春ちゃんと一所に  
 やつて下さい」

といつてゐる様に見えます。

相憎其晩は、空が一面にかき曇つて、雪はいやが  
 上にも降りしきつて居るので、お父つあんは如何  
 にも險呑に思つて、春三を出したくはなかつたの  
 ですか、餘り何度も／＼も言つて己まないの  
 とう／＼春三を使にやることに決めました。

極く小さい時から、此山に住んで居るので、春三  
 は、道には慣れて居ますから、すぐ家を出ました  
 すると「赤」も後れないで一所に飛び出しました、

この寒い雪も風も一向平氣なもんで。それから、直き村に着いてお醫者に會ふことが出来ましたから、すぐお藥を頂いて、大喜びで家に歸りかゝりました。

「赤」はいつも、前に立つて、よい道を案内してビヨイ〜と歩いて行きます、所が、平素から極く危い道の所に來て、「赤」は急に立ち留つてしきりに、そこいらを嗅ぎ回はして居て一向進みません。

「赤」行かないか」

といつて見たが、赤は動かない。

「そら、あそこに森の中から、燈が見える、あれが家だよ、さー急いだ〜」

と言つて見たが、今迄一度でも主人の命令に背いた事のない「赤」は此時丈は、どうしても言ふて



とを聞きません、仕方がないから、春三は「赤」が無闇にうなつて注意してくれるのも構はずに、自分前に立つてすん／＼上つて行きました。

所が、僅か二歩三歩進んだと思ふと、忽ち、底の知れない崖下へ足踏み滑らせて、雪と一所に落ち込んで仕舞つたのです。

さて、其晩もだん／＼遅くなつたが、春三はまだ歸つて来ないので、家では、お父つあんが急に心配し出しました。待つても待つても歸りそうにもない。

「ひよつとしたら、お医者さんがお留宅で、お歸りを待つてるのではありますまいか」

とおつ母さんは言ひました、餘り歸りが遅いのでもう自分の病氣も忘れて仕舞ふ程、お母さんは春

三の事を心配して居ます。

所が、もう彼れ是れ、夜中の十二時も過ぎたと思ふから、門口で忽ち「赤」の聞き慣れた聲で吠え立てるのを聞いたので、

「やー、春は歸つたな」

とお父つあんも、おつ母さんも一所に叫びましたそして、お父つあんはすぐ飛び上つて、門口を開けました、春三がそこに立つて居るに違ないと思つて、

所が、吃驚しました、「赤」二人つ切りで、春三の影も形も見えません。そして「赤」は、しきりに悲しそうな聲で鳴いて居ます、

「あなた、春は雪で埋れて死んだんじゃありませんか?!

おつ母さんは床の中から伸び上つて、お父つあん

に言つた、お父つあんは暫らくは自分の動悸の靜まるのを待つて黙つて考へて居ましたが、やがて「赤」の首つ玉に、藥瓶が結び付けられてゐるのを見付けて、忽ち夫を手に取つて

「な—に、お前大丈夫、生きてるよ、こら御覽手拭で「赤」の首に藥を結び付けてるじやないか、多分、雪崩れで深い所へ落ちたのだから、大丈夫生きて居るのだ、では、己はすぐ今から、「赤」

に案内させて行つて来るよ、といつて、お父つあんは用意して直ぐ出ました。

「赤」は、大喜びの風で、又前へ立つて、とつと、進んで行きます。

さて、「赤」はだん／＼と元の道へ案内して行きましたが、春三が落ち込んだ崖の所へ來て、急に險しい側道へ下つて行きます、道が険しい上に、大

雪と來て居るから、其危い事と言つたら中々一様ではない、お父つあんは何度か足を踏み滑らさうとしては、水柱の下つた木の枝につかまつて漸助かつた位。

やつとの事で、崖下の谷底へ下り付いたから、お父つあんは、方々を見回しては

「春や、春や」

と呼んで見たが、答もなければ、影も見えない、すると「赤」は其谷底でも、まだ一番どん詰めの岩の下まで行つて、しきりに兩足で、雪を掻きはじめました、「はてな」と思つて、お父つあんも一所に、雪を掻き退けて探した所が、とう／＼、其中から、春三の死骸が出て來ました。

お父つあんは、大急ぎで、春三の血だらけになつた冷たい衣物を脱がせて、そして自分の温かい衣

服の中にくるんで、大變な骨折りをしてやつと、上に持つて来て、大急ぎで、家へ歸りました。夫から、家へ連れて来ておつ母さんの床の中に入れて、いろ／＼手を盡して介抱した所が、まあ、どんなに辛な事でしたらう、漸くすると蘇生つた、そして細く兩方の目を開けて、一生懸命におつ母さんの顔を見つめて、

「おつ母さん、お藥が届きましたか？」

これが、春三が蘇生つて始めての言葉でありました。後で、だん／＼聞いて見ると、彼の時春三が崖に落ち込むと、「赤」はすぐ其後に飛び下りて來たので、春三は、やつとの事で、藥を手拭でシツカと頸に結び付けて、家に歸らせたのであつたといふ事です、所や顔や手足に怪我をしました上に、非常

の寒さの爲めに、一時死んで居たのですが、其傷は皆急所を外れて居ましたから、幸に蘇生つたのでありました。

## 和藤内遊び

おきな

これは、和藤内と、和藤内のおつ母さんと、虎との遊びであります。

先づ、真中に障を一枚立て、置いて、障の兩側に甲乙二人が隠れて居る。残りの人は、其二人を一時に見ることの出来る様に、障の真正面に立つて見て居る。そして二人が用意齊つたと見た時に、誰か一人真正面に居る人が、一二三と合圖をする。

其合圖に従つて、例へば甲の人は和藤内になつて